

# 複合的活動の組織化における関与配分の再考—科学教室を例に—

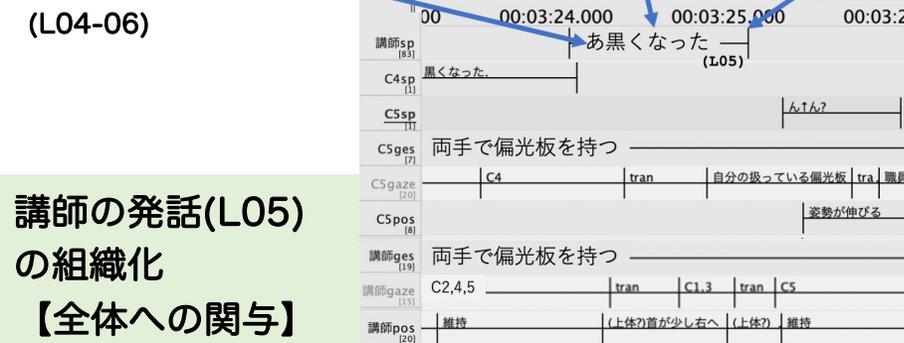
城綾実<sup>1,2</sup> 牧野遼作<sup>3,2</sup> 石川奈保子<sup>2</sup> 白田泰如<sup>4</sup> 山本敦<sup>2</sup> 門田圭祐<sup>2,5</sup> 楊潔<sup>2</sup> 宗政由桐<sup>2</sup>  
立命館大学<sup>1</sup> 早稲田大学<sup>2</sup> 広島工業大学<sup>3</sup> 国立国語研究所<sup>4</sup> 日本学術振興会<sup>5</sup>

## 背景

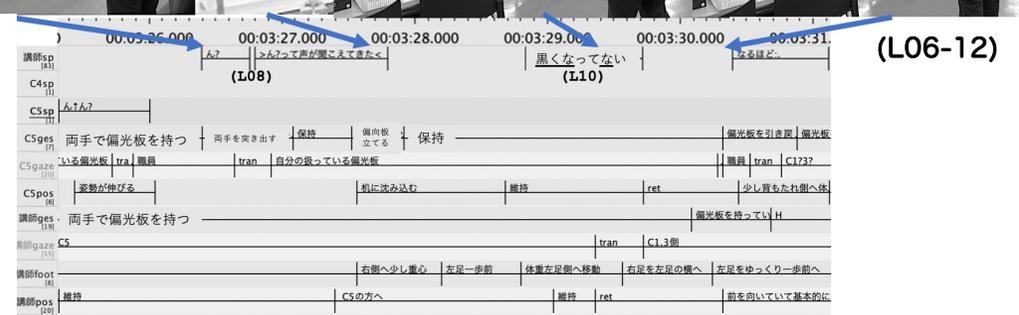
- 関与配分：主要-副次的と支配的-従属的(Goffman 1963=1980)、(支配的)基底-随伴 (西阪 2013)
- 参加者たちが実際に行なっていることに照準し活動の構造的側面を捉える(西阪 2009)

## データ

はまぎんこども宇宙科学館で開催された会員向け科学工作教室 (開催目的)実体験を通して科学的な知識を身につける、理解度向上



- 01 講師 重ねたら::
- 02 (0.3)
- 03 講師 このシートどうなったみんな。
- 04 C4 黒くなった。
- 05 講師 あ黒くなった
- 06 C5 =ん↑ん?
- 07 (0.4)
- 08 講師 ん?(.)>ん?って声が聞こえてきた<
- 09 (0.7)
- 10 講師 黒くなってない
- 11 (0.7)
- 12 講師 なるほど:.
- 13 (0.8)
- 14 講師 <どうやら:>重ねると:黒くなった人と:.
- 15 (0.3)
- 16 講師 黒く↑なって↑ない人がいるようですね。



## 講師の発話(L05)の組織化【全体への関与】

- C4の応答(L04)をほぼ同じように繰り返す
- 参加児童全体を見回すように首を動かす
- ほかの児童たちが新たな返答を述べる機会の創出

## C5の振る舞い(L03-06)の組織化

- 後ろを向く、そのとき応答中のC4が視界に入る
- 向き直り自分の手元の偏光板を見つつ「ん↑ん?」

## C5と講師による活動の開始・終了(L06-12)

- C5は「ん↑ん?」の直後に偏光板を持つ両手を講師の方へ突き出し、講師はC5の方へ前傾
- 講師が上体を起こすとC5も姿勢を正し講師の発話を聞く

## 講師の発話(L08,10)の組織化【個人に主要な関与を向けつつ全体への関与を維持】

- C5の発話(L06)をほぼ同じように繰り返し、早口で一部の児童から疑問が生じていることを述べる
- C5を見続け、L10発話末尾から別の児童に視線を向ける
- 声の大きさは全体に聞こえる程度
- C5個人に主要な関与を向けているような姿勢ではあるが、声の大きさを保つことにより全体への関与を維持

## 議論

- 参与枠組みを用いた関連研究(平本 近刊) →教授者と受講者の人数が非対称となる場面での活動遂行で参加者たちが「全体-個人」を区別
- 分析的留意事項：空間的に組織・再組織されるのは、身体の向きや配置のような視覚的に捉えられるものだけでなく、声を発するといった音声資源も同様→相互行為の根源的な身体性(西阪 2018)